

朝の八時過ぎ。いつもと同じ通勤電車の中。

都心へ向かうこの路線は、平日のこの時間帯になると身動きが取れないほどの満員になる。密着した他人の背中、脇の下から流れてくる香水の匂い、時々耳元に落ちてくる誰かの寢息。

今日もドア横の定位置を確保して、周囲の人にサンドイッチされる形で立っている。

（はぁ、今日も一日長そう……）

鞆を胸の前に抱え直しながら、私はぼんやりと車窓の外を見た。

ビル群の隙間から差し込む朝日が眩しい。今日は水曜日、まだ今週折り返しにも達していない。憂鬱な気分が肩に重くのしかかる。

電車がガタンと大きく揺れて、後ろに立っている誰かの胸が私の肩甲骨のあたりに軽くぶつかった。すみません、と小さく謝る声が聞こえて、それきり静かになる。満員電車では日常茶飯事だ。私も気にせず前を向いた。

ふと、背中に、なにかが触れている気がした。

「……？」

揺れで押しつけられているだけかもしれない。そう思って私はスマホを見るふりをしながらやり過ごそうとする。けれど、その感触は電車の揺れとは無関係に、ゆっくりと私の背中を滑っていた。

肩甲骨の間から腰にかけて、指先のようなものが、なぞるように。

（気のせい、だよな？）

私は少しだけ首を横に向けて、視界の端で背後の気配を探る。

すぐ後ろに立っているのは、金髪にピアスをした若い男の子だった。

年齢は二十歳前後だろうか。細身で色白、耳にはシルバーのフープピアスが揺れている。眠そうな顔でスマホを見下ろしていて、私のことなどなにも気

にしていない様子だ。

(大学生かな。まさか、ね……)

さっと見た感じだけけど、イケメンだ。こんな見た目なのに、わざわざ痴漢なんてするわけがない。それに、私はそもそも――。

(私は、不感症だしな……)

私はまだ「イッた」ことがない。

付き合った男性は数えるほどしかいないけれど、それでも一通りのことは経験してきたつもりだった。けれど、どうしても達することができない。

相手が優しくても、丁寧に触れてくれても、身体はどこか他人事のようにぼんやりとしていて、快感というものが遠い星の話みたいに思える。

自慰をしても同じだった。指を這わせても、下着の中に手を差し込んでも、身体が反応してくれない。「イッたふり」だけは上手くなった。それが自分で

も情けなくて、恋愛から距離を置いて久しい。

（どうせ痴漢されたところで、私は不感症だし……。痴漢だって騒いで大事にする方が、面倒だし……）

だから、大丈夫。

私は自分にそう言い聞かせて、視線をスマホに戻した。

ホーム画面のカレンダーには今日の予定がびっしり並んでいる。仕事のことを考えよう。そう思って呼吸を整える。

その瞬間、また背中に触れる感覚。今度ははっきりとわかった。指先が、ブラウスの薄い生地越しに、私の背中を這っている。

（え……？）

電車の揺れじゃない。誰かが、意図的に、私に触れている。

心臓がドクンと大きく跳ねた。手のひらにじわり

と汗が滲む。振り返るべきだろうか。声を上げるべきだろうか。頭のなかで警告音が鳴っている。けれど、身体は硬直したように動かない。

周囲の乗客はみんなスマホを見ていたり、目を閉じて仮眠を取っていたり、誰も私の異変には気付いていない。

(どうしよう……)

私は必死に自分を落ち着かせる。大丈夫。私は不感症なんだから。なにをされても感じない。ただ触れられているだけ。ちょっと気持ち悪いのを我慢すれば、あと三駅で降りられる。それだけのことだ。

(我慢。我慢すればいいだけ)

そう自分に言い聞かせている間にも、背中を這う指先はゆっくりと下降していった。

ブラウスの裾のあたりまで到達すると、その手はためらいなくスカートの上に移動する。タイトスカ

ートの薄い生地の上から、私の腰のラインをなぞるように動いた。電車が駅に停車する。

ドアが開き、数人が降りて、また数人が乗り込んでくる。人の入れ替わりで一瞬密着が緩んだけれど、次の瞬間にはまた密度が戻る。背後の気配は変わらない。あの金髪の男の子は、まだ私の後ろに立っている。

(本当に、この人なの……?)

もう一度、私は視界の端でちらりと後ろを窺った。彼は相変わらずスマホを見ていた。片手でスマホを操作しながら、もう片方の手は、見えない。

彼のもう片方の手は、私と彼の身体の間で隠れていて、その位置からは私のスカートに触れることができる。

(やっぱり)

でも、確証はない。